教育実践研究　第29集（2019）7－12

［国　語］

表現技法を用いた短歌創作の指導の検討

－小学校高学年における短歌創作の推敲に着眼して－

八木真悠子*

1　問題の所在

平成29年に告示された小学校学習指導要領において，「短歌」の学習は，第３学年及び第４学年の〔知識及び技能〕の（３）我が国の言語文化に関する事項に位置付けられ，「ア　易しい文語調の短歌や俳句を音読したり暗唱したりするなどして，言葉の響きやリズムに親しむこと。」と示された[1)]。また，第５学年及び第６学年では，「思考力，判断力，表現力等」の「B　書くこと」の言語活動例に，「イ　短歌や俳句をつくるなど，感じたことや想像したことを書く活動。」と示されており，「伝統的な定型詩の特徴を生かした創作を行うことによって，七音五音を中心とする言葉の調子やリズムに親しみ，凝縮した表現によって創作する活動」と説明されている。

ここで注目すべきは，「凝縮した表現」についてである。短歌や俳句の創作において，小学校段階の児童がどの程度の表現方法を獲得し，創作活動に活かすべきなのだろうか。「凝縮した表現」を短歌に取り入れるには，どのような手立てが有効なのだろうか。佐藤・木谷（2014）は，「短歌は自分にとっての『真実』を表現するための有用でたしかなツール」[2)]と述べており，子どもの心の内にある「真実」を伝えるためには表現力が求められると考えることができる。また，頼岡（2013）は，「短歌・俳句は、限られた字数の中で、ある心情や情景を描き出すために、修辞法や表現技法に工夫を凝らし、一語一語を吟味し尽して表現されている点で、『ことばの持つ力』を実感させるために有効な教材である。」[3)]と述べている。三十一音という限られた字数の中で心情，情景，出来事が十分に読み手に伝わる短歌を創作するためにも，表現方法を獲得し，実際に表現してみるという手続きが踏まれなければならない。しかし，児童に短歌を創作させても，表現技法を駆使し，表現を工夫する姿があまり見られないという課題を感じる。

本学級（６年21名）で短歌創作に関するアンケートを取ったところ，「短歌を作る学習は楽しいですか。」の質問に21人中18人が「楽しい」と答えた。しかし，「短歌を作ることは簡単ですか。」の質問に対して，21人中12人が「難しい」と答え，短歌創作は楽しんでいるが難しさも感じていることが分かった。また，短歌が出来上がるまでの段階で難しさを感じるときとして，「言葉を選ぶとき」が12人中６人，「表現を工夫するとき」が12人中６人であった。これらの結果から，国語の授業で短歌を作るとき，三十一音に言葉を収めることに集中することで表現の工夫までは辿り着かないことや表現をどのように工夫したらよいのか分からないことが学習時の課題となっていることが推察される。

これまで筆者が感じてきた表現力が高まらないという問題意識や児童アンケートから分かった「言葉選び」「表現の工夫」の難しさを解決するためには，短歌を創作した後，自分の短歌を見直す時間＝推敲段階に着目した指導の検討が必要になると考える。言葉選びの段階では，児童は自分が伝えたいことが三十一音に収まるように考えることで必死である。その段階で同時に表現の工夫まで求めるよりは，三十一音に伝えたいことを当てはめた後に推敲の時間で表現の工夫に着目させることがより良い創作活動につながる有効な手立てとなると考える。

そこで，本研究では，短歌を創作する学習において，自分の短歌を見直す推敲段階に着目し，表現技法の使用を促す手立てを明らかにすることを目的とした。その際，表現技法を観点に自分の作品と対話することが有効であるか，友達と表現技法を話題に対話をすることが表現技法を用いた短歌創作に役立つかどうかについて検証することとした。

2　研究の目的

短歌を創作する学習において，表現技法を観点に自分の短歌を見直すこと，ペアで表現技法を話題に交流することが，表現技法を用いた短歌の作り直しをすることに有効であるか検証する。

*新発田市立中浦小学校

3　研究における実践の内容と検証方法

(1)　実践の内容

①　表現技法の種類と効果の確認

推敲の第一段階である短歌の見直しの場面で，表現技法に着目しながら自分の短歌を見直すために，表現技法に関する知識やその効果を児童に習得させる必要がある。

小学生のコンクール入選作品の中から，表現技法を効果的に用いている短歌を選び，紹介する。短歌の中に隠れている表現技法を探すという意識で様々な表現技法に触れる機会を設ける。その際，技法が使われることでどのような効果が得られているかペアで検討し，学級全体で共有する。紹介する短歌は，単独の表現技法を取り入れているものから始め，複数の技法を活用している作品へと発展させることで，表現技法の用い方には様々な方法があることに気付くことができるようにする。表現技法の習得が十分満たされていることが，表現技法に着目して推敲するために必須の条件であると考える。

②　短歌の見直し段階における表現技法の洗い出し

児玉（2006）は，推敲の難しさについて，「学習者にとっては，できあがった作文はすでに作品として完成しており，完成までに自分のエネルギーの多くは使い果たしてしまったという思いがあるからである。」[4]と述べている。また，清道（2013）は，「初心者は，書き上げた文章について，表記の直しはできるが，文章構成や表現を客観的に見直すことは難しい。」[5]と述べており，表記は判断基準が明確であることから見直しがしやすい一方，判断基準が明確ではない表現は見直しにくいことを明らかにしている。客観的判断ができないことが表現に関する推敲に難しさを作り出しているのであれば，創作した短歌の見直しの段階に客観的に判断ができる手立てを講じる必要があるのではないだろうか。そこで本研究では，推敲の第一段階である短歌の見直しの場面で,自分の作品に使われている表現技法を洗い出す時間を設けることとした。それぞれの表現技法を「○○の術」と名付け，一つ以上使われている場合は「○○＋○○の術」と名付けることにする。自分の短歌を見直すときに，表現技法という客観的に判断できる材料を与えることで，自分の短歌に表現技法が入っているのか，その表現技法を使ったことでどのような効果が生まれているのかを推敲できるように意図した。

③　短歌の書き直しにつながるペア交流

森田（2015）は，「推敲を効果的に行う活動として，他者に表現意図を説明し交流することにより，自らの表現を相対化する。」[6]と述べている。このことを重視すれば，作品の書き直しの前段階で自分が工夫した表現について話をしたり，悩んでいる部分を共有したりすることは，相談をする側も助言する側も表現力を高めるために両者にとって有効であると捉えることができる。そこで，ペアで交流する際には，「表現技法を入れるとしたらどこに何を使うと効果的か。」「その表現技法を使って，どのような工夫ができるか。」を観点として与え，対話の目的が明確になるようにする。

(2)　検証方法

本研究では，手立てを講じた際の児童の発言，アンケートの回答や記述をもとに，表現技法を活用した短歌の作り直しに有効な手立てであったかを検証し，考察を加える。さらに，３名の抽出児の思考に着目し，創作した短歌の推敲前と推敲後の表現技法の活用の変容を見る。抽出児は，３名とも事前アンケートで「短歌を作ることは簡単ですか。」の質問に対して，「あまりあてはまらない」と答えており，短歌創作に難しさを感じている児童である。実際に，短歌を創作する場面では，三十一音に収めることに悩んでいる様子で短歌が完成するまでに時間がかかる様子が見られた。また，知っている表現技法は，３人とも共通して「言葉の繰り返し」のみであり，表現技法の習得も乏しい。

4　活動の実際

(1)　研究の時期　　平成30年９月

(2)　研究の対象　　公立小学校第６学年21名

(3)　単元計画

単元名　　国語「たのしみは」 小学６年教科書　光村図書

単元の目標　　短歌のもつ表現の効果を確かめたり，工夫したりして短歌を創作することができる。

指導計画

時間・学習課題	学習活動
第１次（２時間） 短歌の創作	・日常で喜びや楽しみを感じる場面を短作文に書く。 ・三十一音で収まるように言葉を選んで短歌を創作する。
第２次（２時間） 短歌の見直し	・短歌に使われる表現技法の種類と効果を確認する。 ・自分の短歌に使われている表現技法を探す。 ・ペアで作品の交流をし，効果的に使える表現技法を検討する。
第３次（２時間） 短歌の書き直し	・取り入れたい表現技法を選び，短歌を作り直す。 ・書いた短歌をグループで紹介する。

5　研究における実践の結果と分析

(1)　児童の発言・アンケート結果からの有効性

①　表現技法の種類と効果の確認

一作目の短歌を創作した後，表現技法の種類とその効果について学級全体で確認をした。小学生の短歌コンクール入賞作品を用いることで，児童は興味をもちながら表現技法を探し出していた。また，同年代の児童が創作した短歌に，様々な技法を用いた表現の工夫がされていることに気付くことは，児童にとって短歌創作の良い刺激となり，「自分の短歌はどうだろう。」「自分もこんな短歌を作ってみたい。」といった動機付けにつながった。

次に，短歌に使われている表現技法を見つけた後は，その技法を使うことでどのような効果があるのかをペアで検討し，学級全体で共有した。以下は，比喩表現を扱った短歌や言葉の繰り返しを用いた短歌の効果を確認した際の児童のやりとりである。

＜比喩表現についての効果を共有する場面＞

Ｔ：「比喩表現を使うことで，どのような効果があると思いますか。」
Ｃ：「比喩が使われていると，読んでいる方は想像力を働かせることができておもしろいと思います。」
Ｃ：「クイズみたいに，例えているものの本当のものを当てたくなる。」
Ｃ：「何かに例えた方が，その時の様子が伝わりやすい感じがします。」

＜言葉の繰り返し表現についての効果を共有する場面＞

Ｔ：「繰り返し表現を使うことで，どのような効果があると思いますか。」
Ｃ：「言葉を繰り返しているから，その言葉が強調されて伝えたいことがよく伝わる気がする。」
Ｃ：「繰り返していると，次にどんどんつながっていく感じがします。」
Ｃ：「同じ言葉を繰り返すことで，リズムよく読めます。」

実際の短歌作品を使って確認することで，表現技法を言葉と意味で覚えるよりも，児童は効果について実感を伴いながら確認することができた。ペアで検討した後に，学級全体で共有することで，友達の考えを聞いて気付かなかったことに気付いたり，考えを深めたりする姿が見られた。

②　作品の見直し段階における表現技法の洗い出し

短歌の見直し段階では，前時で学んだ表現技法の種類を思い出しながら，自分の短歌に取り入れられているものがあるか探し出す活動を行った。表現技法を観点に自分の短歌を見直すことで，意図的に取り入れた表現技法を振り返ったり，無意識に入れていた表現技法に気付いたりすることができた。また，表現技法を一つも取り入れていない児童は，自分の短歌を受け止め，短歌の作り直しの段階へと意欲を高めていた。見直し段階で自分の短歌を客観的に判断できる観点があることで，全員が自分の短歌と対話しながら見直しの作業に取り組むことができた。本学級（６年21名）での，表現技法の洗い出しの結果は，表１の通りである。

表１　短歌に使用している表現技法

使用している表現技法	人数
体言止め	5人／21人
言葉の繰り返し	2人／21人
比喩	1人／21人
何も使っていない	13人／21人

③　短歌の書き直しにつながる他者との交流

自分の短歌を見直し，表現技法を洗い出した後は，作り直しに向けてどのような表現技法を取り入れるとよりよい短歌になるのか，ペアで交流を行った。その際，推敲前の自分の短歌を受け止め，どの表現技法を使ってどのように直したいと思っているのか，作り直しに向けて悩んでいることは何かを話題に交流を行った。一作目の短歌に表現技法を取

り入れていない児童が多かったため，話題は「どんな表現技法を入れるか。」が中心になっていた。「この表現技法を使ってみたいけど，どこに入れられるかな。」と友達に悩みを相談し，助言をもらう児童も多かった。ペア交流をしている最中に，児童の口から自然と表現技法の名称が出ている姿が見られた。

単元終了後，短歌の学習に関する事後アンケートを取ると，「友達にアドバイスをもらうことは，短歌の書き直しに役立ちましたか。」の質問に19名の児童が肯定的な評価を出した。その理由については，「自分が思いつかないような新しいアイデアが出たから。」「一緒に考えると気付かないことに気付けるから。」「悩んでいると一緒に言葉を選んでくれたから。」という意見が出た。

(2)　抽出児（A児）の思考の変容からみた有用性

①　表現技法を観点に自分の作品を見直すこと

単元終了後に取った短歌創作に関するアンケートでは，「表現技法に注目して推敲することは，短歌を作り直すときに役立ちましたか。」の質問に「役立った」と答えた。その理由を尋ねると，「表現技法に注目したら，今までの自分の短歌よりも一つ上の短歌を作れたから。」と答えた。A児は，一作目の短歌について，表現の洗い出しを行った際，自分の短歌には「体言止め」が使われていることに気付いた。しかし，「〇〇のとき」という語尾は，教科書に載っている定型文と同じであるため自分で考えて取り入れたわけではなかった。

②　表現技法を観点に友達と作品について対話すること

A児は，ペアの児童に自分の作品の悩みを話し，表現の工夫について助言をもらった。以下は，A児とペアの児童（D児）のやりとりである。

> A児：「私の短歌，あんまり表現技法を使えてなくて，おもしろくないんだ。何か入れてみたいけど，何を入れたら良いのか分からない。」
> D児：「オノマトペとか使えるところあるかな。」
> A児：「音に変えられる言葉は，入ってないなぁ。」
> D児：「じゃあ，変えたい言葉ある？」
> A児：「・・・・」
> D児：「言葉の順番を入れ替えてみるのはどうかな。」
> A児：「あ，それならできそう。」

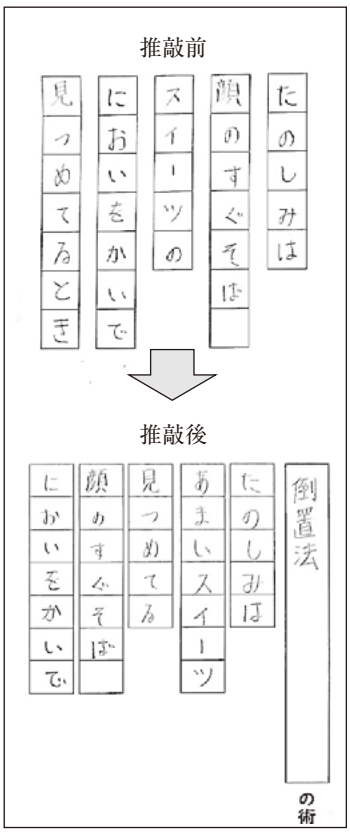

図１　A児の短歌

このように作品に取り入れることができそうな表現技法を友達と検討し，言葉の入れ替えをして「倒置法」を用いた短歌を作り直した。A児の事後アンケートでは，「推敲するときに，友達からアイデアをもらうことは役立ちましたか。」の質問に，「やや役立った」と答えている。どんなところが役立ったか尋ねると，「行を入れ替えてみたら，自分が楽しいと思うにおいをかぐところがよく伝わってくるようになったから。」という回答を得た。

(3)　抽出児（B児）の思考の変容からみた有用性

①　表現技法を観点に自分の作品を見直すこと

B児の一作目の短歌を見ると，七音五音という言葉の調子やリズムに乗れず，字余りが多い。表現技法の洗い出しの場面では，自分の短歌を声に出して読み直してみるが，調子やリズムが崩れていることには気付かず，見直すところを見つけることが難しい様子であった。しかし，表現技法を観点に自分の短歌を見直すと，短歌の末尾に「時間」という名詞が入っていることから，自分の作品に「体言止め」が使われていることに気付いた。

②　表現技法を観点に友達と作品について対話すること

B児は，推敲後の創作で「比喩」表現を用いた短歌を作り直した。比喩表現を取り入れた理由について，「比喩を使うと，読み手が何を例えたのか考える楽しさが生まれて自分の作品に興味をもってもらえると思ったから。」と話した。また，三十一音に収まらず字余りが多かった一作目に比べ，二作目は五七五七七を意識した調子のよい短歌に変化した。このように変化するまでのペア対話の過程を以下に記す。

B児：「自分では気づかなかったけど，体言止めを使っていた。次は，比喩とか使ってみたいな。」
E児：「どこか例えられそうなところあるかな。」
B児：「寝ている様子とか？」
E児：「寝ている様子ね。いいね。寝ているイメージの動物とかいる？」
B児：「寝ているといえば，ナマケモノかコアラだよね。でも，ナマケモノはイメージがよくないな。」
E児：「確かに。」
B児：「すやすや寝ている感じだから，コアラにしよう。」
E児：「昼寝する時間だと８文字だから，昼寝するときの方がしっくりこない？」
B児：「そう言われてみれば…。」（指を折りながら数える。
「他のも文字数を減らしてみようかな。」

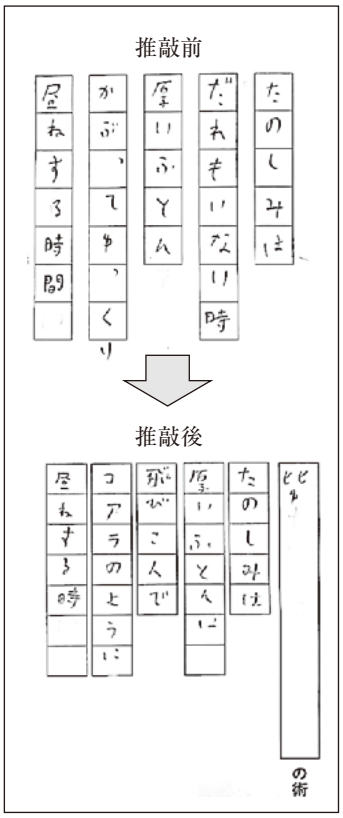

図２　Ｂ児の短歌

(4)　抽出児（Ｃ児）の思考の変容からみた有用性

①　表現技法を観点に自分の作品を見直すこと

Ｃ児は，短歌の創作に関する事前アンケートで，唯一知っている表現技法に「言葉の繰り返し」を選んだ。そして，短歌の見直し場面では，その表現を使っていることを整理した。他には表現技法を使っていなかったが，Ｃ児の場合は意図的に「言葉の繰り返し」を用いていた。その表現技法を入れることで得られる効果まで自分の中で確立していることから，推敲後も「言葉の繰り返し」は残したいと話した。単元終了後に取った短歌創作に関するアンケートでは，「表現技法に注目して推敲することは，短歌を作り直すときに役立ちましたか。」の質問に，「役立った」と答えている。その理由は，「表現技法があまり分からないときは，見直しが難しかったけど，色々な表現技法を知ったら，短歌を作り直しやすくて役立ったから。」という回答を得た。

②　表現技法を観点に友達と作品について対話すること

Ｃ児は，短歌の作り直しで「オノマトペ＋言葉の繰り返し」の術と称して，二つの表現技法を取り入れた短歌を創作した。前述した通り，「言葉の繰り返し」の技法は，一作目から意図的に取り入れて創作しており，それを残したい思いや理由をペア交流で友達に伝えた。一方で，「言葉の繰り返し」以外にも，自分の短歌に他の表現技法を入れてみたいといという意識も高く，場面の様子が伝わるにはどんな技法を用いることが効果的か友達と検討した。ペアで対話をすることで，新たな技法を取り入れるまでの過程が下記のやりとりで分かる。

Ｃ児：「私は，自分で入れた言葉の繰り返しは残したいな。好きな音楽と好きな小説って入っていると，読んでいる人が私の好きなものをよく分かってくれる感じがするから。」
Ｆ児：「そうだね。好きな○○と好きな○○は残していいと思うよ。」
Ｃ児：「でも，もっと他のも使って様子が伝わるようにしたいな。」
Ｆ児：「オノマトペを使ってみたら？」
Ｃ児：「オノマトペって,どうやって使うんだっけ？」
Ｆ児：「音を表す様子に使ってみるといいんだよ。例えば，ページをめくる音とか？」
Ｃ児：「あっ，思いついた。ぱらぱらぱらって使えそう。これを入れるとページがどんどん進んでいく感じがする。」

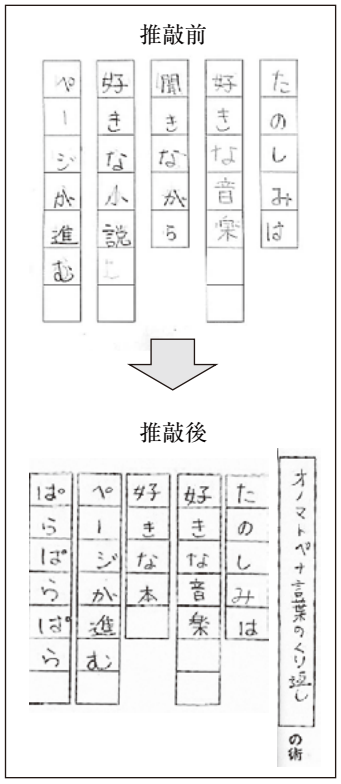

図３　Ｃ児の短歌

6　成果と課題

短歌を創作する学習において，推敲場面に着眼し，表現技法を活用した短歌に作り直すことができるよう，表現技法を観点に与え自分の短歌と対話すること，友達と短歌について対話することの二点が有効であるか検証し，次のような

成果を得た。

(1)　表現技法を観点に自分の短歌を見直すこと

短歌の推敲において，表現技法を観点に自分の短歌を見直す活動を取り入れた。A児とB児は，表現技法の洗い出しの段階で，自分の短歌には表現技法は使われていないと思っていたが，教科書の定型文からもってきた「○○のとき」という言葉が表現技法であったことに気付いた。表現技法が使われていたことに気付く一方で，二人とも「今度は自分で考えて表現技法を入れてみたい。」と前向きな姿勢を見せた。また，一作目の段階で表現技法を意識して「言葉の繰り返し」を取り入れた短歌を創作していたC児は，「表現技法」という観点のもと自分の短歌を見直すことで，取り入れた種類に留まらず，効果までじっくりと考えて自分の短歌と向き合う姿が見られた。また，C児もA児，B児と同様，様々な種類の表現技法に目が向き，作り直しに向けて表現技法を活用することに意欲的な発言が見られた。

これは，本学級の児童アンケートで「作り終わった後，よりよい短歌に直したいと思いますか。」の質問に21人中20人が肯定的な評価をしたことにも関わるのではないだろうか。これまでは，よりよい作品へと直したい気持ちはあったが，その推敲の仕方に手立てが不十分であり，作り直しの段階で表現の変化が見られなかったと考えられる。本研究では，自分の短歌を見直す段階で，客観的に判断できる観点を与えることにより，自分の短歌の表現技法に気付き，作り直しの段階に向けての意欲を高めていくことにつながったと考えられる。

(2)　表現技法を観点に友達と作品について対話すること

作り直しの段階で表現技法を活用できるよう，ペアでの交流を取り入れた。表現技法を短歌に取り入れることに難しさを感じていた抽出児３名ともに，対話活動では友達に自分の悩みを相談し，その後にアイデアをもらったり一緒に考えたりしながら，自分なりに工夫して短歌の中に表現技法を使用することができていた。A児とB児は，推敲前の作品に自分で意識して入れた表現はなかったが，対話を通して単元開始時に知っていた「言葉の繰り返し」ではなく，「倒置法」や「比喩」の表現を友達と考えて取り入れた。児童の中に使ってみたいと感じる表現技法が生まれたこと，その表現技法について対話で考えを深められたことは，作り直しの前段階で表現技法の使用を促す有効な手立てになっていたと考えられる。また，抽出児のほかにも学級全体として，対話の観点に「表現技法」が与えられたことにより，話題の中心が逸れることなく最後まで話を続ける姿が見られた。しかし，課題も認められた。ペアでの対話を見ていると，友達が表現技法の種類に悩んでいると，多くの児童が「オノマトペ」を薦める様子が認められた。「オノマトペ」は，児童にとって身近な表現技法でアイデアも出しやすいのだろう。表現技法の種類を薦める際には，その表現を使うことでどのような効果が得られるかをもっと意識させることができていれば，助言の内容にも深まりが見られ，様々な表現技法に広がっていったのではないだろうか。

7　結語

単元終了後に行った短歌の学習に関するアンケートにおいて，「短歌を作ることは楽しいですか。」の質問に，21人中20人の児童が「楽しい」と答えた。また，「表現を工夫しながら短歌を作ることができますか。」の質問には，21人中19人が「できる」と答えた。単元開始前は，短歌を作ることに難しさを感じている児童が多かったが，本実践を通し，自分の短歌を見直したり作り直したりすることへの抵抗感が減り，表現技法を活用できたことに一人一人が達成感を感じることができた結果ではないだろうか。今後も，児童の学習意欲を高められるよう，つまずきや困り感に寄り添った単元開発に努めていきたい。

＜引用・参考文献＞

１）文部科学省　小学校学習指導要領（平成29年告示）解説　国語編
２）佐藤弓生・木谷紗千子　『子ども歌人になる！短歌はこうつくる』合同出版，2014年，P.103
３）頼岡由美　「短歌・俳句に学ぶことばの力－主体的に活動する場をどう作るか－」『国語教育研究』(54)，2013年
４）児玉　忠　「記述・推敲の指導とその方法」『朝倉国語教育講座　４書くことの教育』朝倉書院，2006年，P.138
５）清道亜都子　「書くことの教育における理論知と実践知の統合」渓水社，2013年
６）森田香緒里　「Ⅴ　書くことの指導」『国語科重要用語事典』明治図書，2015年